ショパンの『ヴァルス』ヘ短調, 作品七〇ノ二, 遺作

―― パリ・オペラ座図書館所蔵手稿譜 ――

平　林　正　司

Ⅰ　パリ・オペラ座図書館・博物館所蔵手稿譜

パリ・オペラ座図書館・博物館（以下，オペラ座図書館）には，フレデリック・フランソワ・ショパン Frédéric François Chopin の数篇の手稿譜[1]が所蔵されている。[2]『ヴァルス』嬰ハ短調，作品六四ノ二 *Valse* en ut dièse mineur, op. 64 n°2,『ヴァルス』変イ長調，作品六四ノ三 *Valse* en la bémol majeur, op. 64 n°3,『ヴァルス』ヘ短調，作品七〇ノ二，遺作 *Valse* en fa mineur, op. posth. 70 n°2,『マズルカ』変イ長調，作品五九ノ二 *Mazurka* en la bémol majeur, op. 59 n°2,『エチュード』イ短調，作品二五ノ四 *Étude* en la mineur, op. 25 n°4である。[3]

残存する彼の手稿譜はもちろん，ショパンの楽譜校訂と研究のための第一級文献であって，オペラ座図書館所蔵手稿譜は，数は少ないながらも，ヘンレ版[4]，エキェル校訂版[5]における当該楽譜の典拠で原資料の筆頭に挙げられるほど，重視されている。しかしながら，ヘンレ版にしても，

---

(1)「手稿譜」という言葉は包括的に用いられるが，作曲者自身が手書きした自筆譜と，他人が手書きした写譜がある。

(2) Bibliothèque-Musée de l'Opéra National de Paris, Rés. 50.

(3) 同図書館には『練習曲』作品一〇ノ二の下記の修正譜も所蔵されている。Étude n°2. Esquisse corrigée sous la direct. de Chopin. Rés. 50.

(4) Frédéric CHOPIN, *Walzer*, Herausgegeben von Ewald Zimmermann, G. Henle Verlag, 1978, p. 100, p. 104.

エキェル校訂版にしても，オペラ座図書館所蔵手稿譜に見られる肝心な相違点を，必ずしも充分に指摘していない。なお，パデレフスキ校訂版では言及されていない。ヘンレ版も，エキェル校訂版も，数々の手稿譜を典拠とした労作であって，特に後者の「典拠解説」Source Commentary には，「要約された」abridged と明記されているのであるから，すべての相違点を明確にするように求めるには無理がある。それにしても，主要な異同の読み方が，私とは違うように思われる。

因みに，「九曲のワルツは作曲家自身によって刊行された。他のワルツ（徹底的に加筆されている）は彼の死後に出版されたのであって，一曲の完全なワルツを仕上げるショパンの方法を考察する時，考慮に入れるべきではない。」[(6)] とするようなアーサー・ヘドリー Arthur Hedley の見解に現在，同調する研究者がいるであろうか。確かに，遺作のヴァルスの出版楽譜に問題があることは否定できないが，それでも，ショパンの作品から除外するにはあまりに魅力的な小品が残されているのであって，手稿譜の検討によってショパンが意図した創造を再現することは，研究者の熱望するところであるばかりか，ショパンを真に愛する人々に新しい美の体験をもたらすであろう。第一，彼の生前に出版された楽譜，あるいはそれらを多かれ少なかれ継承する現在の出版楽譜でさえも，完璧とは言いがたいことは周知の事実である。そして，それはヴァルスに限られる訳ではない。

『ヴァルス』嬰ハ短調，作品六四ノ二の手稿譜は二葉の断片的なエスキスに過ぎないが，この稀代の名品の詩的想念を書き留めた最初のものであることに些かの疑念もなく，極めて貴重な価値を有する。これは，エキェル校訂版においてのみ，筆頭参照資料として挙げられている。[(7)] しかし，

---

(5) Fryderyk CHOPIN, *Walce*. A., edited by Jan Ekier, Wydanie Narodowe, Warszawa, 2001, Souce Commentary, pp. 11-12. F. CHOPIN, *Mazurki*. A., edited by J. Ekier, Wydanie Narodowe, Kraków, 1998, Souce Commentary, p. 26. F. CHOPIN, *Etudy,* edited by J. Ekier, Wydanie Narodowe, Warszawa, 2000, Souce Commentary, p. 18.

(6) Arthur HEDLEY, *Chopin* , J. M. Dent and Sons Ltd., 1963, p. 150.

そこでは，部分的に言及されるに留まっていて，私見ではもっとも肝要と思われる箇所が無視されている。このエスキスに関しては，別稿で論じることにしたい。

『ヴァルス』変イ長調，作品六四ノ三の手稿譜も二葉のエスキスであるが，『ヴァルス』嬰ハ短調のそれとは異なり，曲全体が記譜されている。これは，ヘンレ版とエキェル校訂版で，筆頭参照資料に挙げられている。(8) この草稿は一気呵成に書かれ，旋律はほとんど完成されている。ただし，スラーは第一六三－第一六四小節に付されているだけであるし，強弱記号はない。和声は，第二－第四小節が欠落し，出版楽譜では第一三小節第二拍－第一四小節に初出の，左手の平行六度の和声が表れないなど，相違が見られる。とりわけこの平行六度の箇所の異同は無視できないはずであるのに，二つの版ではまったく触れられていない。

『マズルカ』変イ長調，作品五九ノ二は，二種の手稿譜が残されている。これらは，エキェル版では，筆頭参照資料に挙げられ，一つは「スケッチ」Sketch，もう一つは「手稿譜」Autograph と区別されている。(9) 二番目の手稿譜はより完成度が高く，一番目のそれより後のものであることは確かである。ただし，エキェル版では指摘されていないけれど，テンポの指定はなく，デュナーミクも部分的であって，これも完成譜とは言えない。いずれにしても，二段階の草稿が存在するというのは当然，格別の意義があり，これらのエスキスを出版楽譜と詳細に比較検討することによって，この作品の完成に到る推敲過程が明らかになるであろう。私のショパン観とは立場を異にする，マズルカを重視する研究者の方々に，これら二つの手稿譜の精密な考証を委ねたい。

『エチュード』イ短調，作品二五ノ四の手稿譜は，調号が欠けているも

---

(7)　F. CHOPIN, *Walce*. A., *op. cit.*, Souce Commentary, pp. 11-12.

(8)　F. CHOPIN, *Walzer*, *op. cit.*, p. 100, p. 104. F. CHOPIN, *Walce*. A., *op. cit.*, Souce Commentary, p. 12.

(9)　F. CHOPIN, *Mazurki*. A., *op. cit.*, Souce Commentary, p. 26.

のの，アジタートのテンポと二分の二拍子の指定もあり，ほぼ完成された形をとっている。これは，エキェル校訂版で，筆頭参照資料に挙げられている。[10]

以上の手稿譜はいずれも，溢れ出る着想を書き留めようとした走り書きであるだけでなく，修正の跡が著しく，ショパンという天才が，着想の閃きを作品として完成させるために，いかに多大の知力を傾注したかを示唆するものである。一九二一年に出版された，エドワール・ガンシュの『フレデリック・ショパン，作品と生涯　一八一〇－一八四九年』の序文で，カミーユ・サン・サーサーンス Camille Saint-Saëns が記している誤解は，現在に到っても散見される。「彼は音楽を『制作した』のではない。彼はただ霊感に従っていたのだ。」[11] 彼はもちろん少年期から即興演奏に優れた音楽家であった。しかし，それに留まることはなかった。彼は感情の迸りを知性によって，そして職人的技能によって周到に調琢し，一個の作品に結実させたのであった。繊細な感性と強靭な知性の，比類ない融合がショパンという芸術家の本分である。彼の悲哀も激情も気高い。しかし，彼は，いかに高貴なものであれ，着想を制御せずに作品化するような作曲家ではなかった。

Ⅱ　『ヴァルス』ヘ短調

オペラ座図書館に所蔵されているショパンの手稿譜の中で唯一，端正に清書され，修正された形跡が皆無なのは，『ヴァルス』ヘ短調，作品七〇ノ二，遺作である。これだけが「F・ショパン」F. Chopin の署名入りである。楽譜左上には，「ヴァルス」Valse とだけ記されている。献辞は書かれていない。

『ヴァルス』ヘ短調は一八四一年に作曲された。[12] ショパンの死後，初め

---

(10)　F. CHOPIN, *Etudy, op. cit.*, Souce Commentary, p. 18.

(11)　Édouard GANCHE, *Frédéric Chopin, sa vie et ses œuvres 1814-1849,* Mercure de France, Paris, 1921（1926）, Préface, p. 9.

て出版されたのは一八五五年のことで，彼の友人でもあったジュリアン・フォンタナ Julian Fontana の校訂による。現在では，手稿譜に基づく異版も出版されている。しかし，オペラ座所蔵手稿譜には，それらと幾多の相違点があるし，ヘンレ版やパデレフスキ校訂版において言及されていないことを考慮すれば，これを公表する意義はあると思われる。エキェル校訂版では，*Walce*. B で参照されるに違いない。

『ヴァルス』ヘ短調は高度な技巧を必要としないヴァルスの一つであって，一八二九年に作曲された『ヴァルス』ロ短調，作品六九ノ二，遺作 *Valse* en si mineur, op. posth. 69 n°2，一八四三年に作曲された『ヴァルス』イ短調，*Valse* en la mineur, KK IVb n°11とともに，もっとも演奏容易な作品群に属する。三つの小品はいずれも，一音のアウフタクトで始まる優しい主要楽想を有し，やや感傷的ながらも，旋律の抒情的な美しさを特徴としている。たとえば『ヴァルス』ヘ短調の第五－第九小節の曲折する旋律線のアラベスクは，ショパンに特有の魅力を発揮していると言えよう。彼がこの作品を出版しなかったのは，二部形式のあまりに単純な構成，輝かしい技巧性の欠如が理由かとも思われるけれど，それにもかかわらず，ショパンのヴァルスの中でも，外面的な華美を排した夢想的な曲趣ゆえに，優れた作品の一つに数えられる。

貴婦人たちに愛好されたこの曲には，オペラ座図書館所蔵版の他にも，幾つか手稿譜が存在する。校訂して本稿に付載する手稿譜は，ショパンがパリの貴婦人たちの一人に贈った，幾つかの同曲手稿譜の一つであると推定される。

Ⅲ　校訂方針

巻末に収載する楽譜は平林の校訂による。手稿譜ゆえの欠落を補足し，また慣例的な記譜法に改める方が適切と判断した。ただし，実質的な修

⑿　Cf. Tadeusz. A. ZIELIŃSKI, *Frédéric Chopin*, Fayard, Paris, 1993, p. 609. 諸説があるが，現在では，少なくとも初稿を一八四一年とする説が有力である。

正・補筆は一切，施していない。

変更点は以下のとおりである。①四分の三拍子が記されていないが，これを補った。②低音部譜表第一拍の付点二分音符の上の４分休止符は，最後の完全三小節のみに記されているが，それ以前の同様の諸小節にも付加した。③クレシェンドとスラーの記号が小節線を超えている箇所は，小節線で断ち切った。④臨時記号は慣習的な記譜法に改め，不要なものは削除した。⑤反復のために，第二〇小節と後続の小節に，《１volta》，《2ème》と書き入れているが，前者はイタリア語，後者はフランス語と考えられ，不統一のために，「１」，「２」に変えて，さらに，慣例的な線を加えた。⑥第二五小節，第三三小節で，右手の最初のト音は，低音部譜表から高音部譜表に移動させた。⑦第二六小節，第三四小節で，第二拍・第三拍の左手の和音も，低音部譜表から高音部譜表に移動させた。⑧第三五小節，第五〇－第五一小節で，第一拍の音符に欠けていると判断される付点を補った。⑨第三六小節で，第一拍の二つの八分休止符を四分休止符に変えた。

なお，第二五－第二八小節と第四一－第四四小節で，スラー，クレシェンド，デクレシェンドの指示が異なるが，敢えて統一することを避けた。ヘンレ版12ａでは，第五一小節（ヘンレ版第七一小節）第二拍の低音部譜表の一点変ロ音に改めて変記号が付されているが，これは不要と思われ，手稿譜の記譜に従った。テンポは記されていない。テンポ・ジュストであろうと推測される。

楽譜校訂にあたっては，音符や休止符に関わる事柄はもっとも重要であるけれど，たとえばスラー，あるいはクレシェンドとデクレシェンドのようなものの存否だけでなく，それらの起点と終点をどこに置くかをも軽視して良いとは，私には思われない。私としては，スラー，クレシェンド，デクレシェンドの類に到るまで，原譜を可能な限り再現するように微力を尽くしたつもりだ。

Ⅳ　補足

オペラ座図書館はこの手稿譜を自筆譜としているが，モーリス・ブラウンは別人による写譜と判断している[13]。しかし，彼も認めているように，署名は間違いなくショパンの筆跡である。なお，この手稿譜は，シルヴァン・ギニャールによってすでに，手書きの再現がなされている[14]。ただし，この著作の採譜は乱雑であって，オペラ座図書館所蔵のヴァルス，特に『ヴァルス』嬰ハ短調の手稿譜に関しては誤りが多く，『ヴァルス』ヘ短調の手稿譜についても数箇所が原譜と異なる。たとえば，原資料の第一二小節第一拍に存在しない装飾音が，同書では付けられている。

付記１：ショパンの手稿譜の閲覧と採譜を許可してくださった，パリ・オペラ座図書館・博物館に感謝する。長年，同図書館における私の資料収集を御親切にお世話し続けてくださった，ミシェル・トルムイユ氏に厚くお礼を申し上げる。(Je tiens à remercier tout le personnel de la Bibliothèque-Musée de l'Opéra National de Paris, en particulier, à M. Michel TREMOUILLE, qui m'a chaleureusement accuelli.)
付記２：この版は，二〇〇七年五月一二日，平林宅において，日野香織様によって本邦初演された。日野様に感謝の意を捧げる。

---

(13) Maurice J. E. BROWN, *Chopin, an index of his works*, Macmillan, 1972, p. 141.

(14) Silvain GUIGNARD, *Frédéric Chopins Walzer*, Verlag Valentin Koerner, 1986, pp. 299–307.

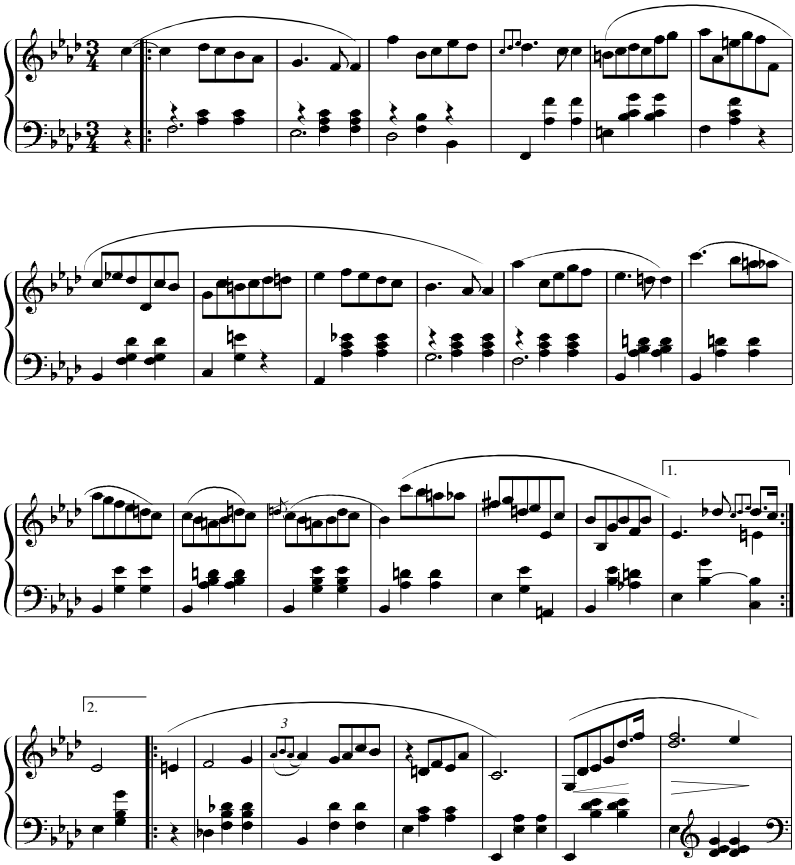
Frédéric François CHOPIN, Valse en fa mineur, op. posth, 70 n°2

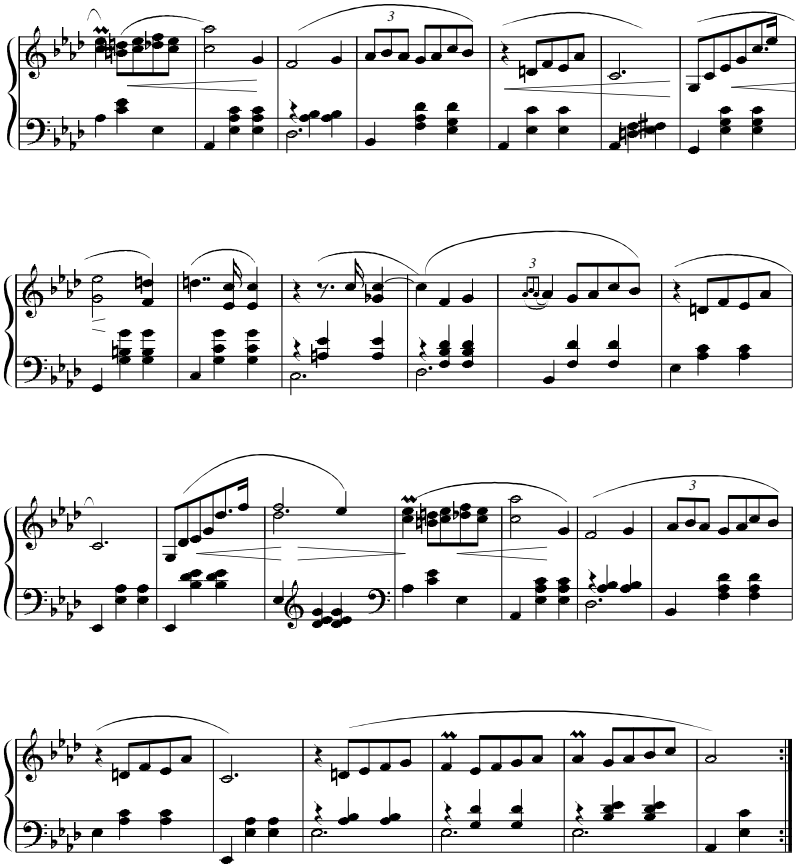
—le Manuscrit conservé à la Bibliothèque de l' Opéra National de Paris—

(Édition par Masaji HIRABAYASHI)

Valse

F. Chopin





fin